

ポルトガル語の接続法未来—コーパスに基づく接続法現在との対比¹⁾

鳥越慎太郎

1. はじめに

本稿ではポルトガル語の接続法未来の使用のうち、特に接続法現在と選択的とされることがある一部の時間の副詞節表現や、接続法現在を用いた表現との差異の解説がなされることが少ない関係詞節表現について取り上げる。まず、これらについて意味と統語の面から理論的な分析を試みている先行研究をレビューして仮説をまとめ、コーパスを分析し検討する。

2. 接続法未来について

接続法未来はポルトガル語とスペイン語、ガリシア語に見られる動詞の法時制形式であるが、現代語で用いられているのはポルトガル語に限られるとされる (Fleischman 1982, 137; Raposo et al. 2013, 541)。なお、ポルトガル語ではヨーロッパ変種、ブラジル変種のいずれでも同様に用いられる。

ポルトガル語の接続法未来の形式変化は、直説法完了過去の1人称複数形と共通する語幹に語尾を続ける (Bechara 2007, 237; Cunha & Cintra 2007, 406)。なお、語尾に不規則形はない。

2.1. ポルトガル語の接続法未来が用いられる表現

接続法未来は多くの文法書や教材で「未来で生じ得る事柄を表現する」動詞形式であると定義される (e.g. Cunha & Cintra 2007, 489; Raposo et al. 2013, 541; etc.)。しかし、実際には未来の内容のみに限らず、発話時を含む内容も表現することができる(1)。一方で、接続法現在も発話時以降の未来の内容を表現することができる(2)。

- (1) José sempre dança com a mulher que tiver olhos azuis. (José は青い目をしている女性だといつも踊りたがる)
- (2) Antes que você chegue, eu vou sair. (あなたが到着する前に私は出ていこう)
- (Comrie & Holmback 1984, 218, 219; 以降、和訳と下線は本稿筆者による)

また、接続法未来は接続法現在に対応する未来時制としては機能しない。

- (3) Sinto muito que ele esteja ausente. (彼が不在で残念だ)
- (4) Senti muito que ele estivesse ausente. (彼が不在だったのが残念だった)
- (5) Sentirei muito que ele *estiver ausente. (彼が不在となるだろうことは残念だろう)
- (6) Sentirei muito que ele esteja ausente.

(3)は現在の文脈であるため、「彼が不在である」という内容も接続法現在時制で表現される。同様に、(4)は過去文脈であるため、「彼が不在であった」という内容は接続法(未完了)過去時制で表現される。一方、(5)は未来の文脈であるが、ここで「彼が不在となるであろう」ことを接続法未来で表現することは文法的に許容されない。この場合は(6)のように、接続法現在で表現される。

以上より、接続法未来と接続法現在は時間指示の面に対立するのではなく、用いられる表現が異なるものであることがわかる。²⁾以下に、Cumha & Cintra (2007) や Raposo et al. (2013) などに従い、接続法未来と接続法現在が用いられる表現を統語構造と意味の観点からまとめる。

接続法現在	接続法未来
<ul style="list-style-type: none">・名詞節表現・副詞節表現<ul style="list-style-type: none">・条件 (<i>caso, a não ser que</i> など、<i>se</i> 以外の表現)・時間 (<i>antes que, até que</i> など)・譲歩・目的・関係詞節表現・主節 (特定の副詞に続く表現)	<ul style="list-style-type: none">・副詞節表現<ul style="list-style-type: none">・条件 (<i>se</i>)・時間 (<i>quando, depois que, logo que</i> など)・程度・様態・関係詞節表現・譲歩の定型表現

図 1 接続法現在と接続法未来が用いられるそれぞれの表現

この中で、時間の表現と関係詞節表現については接続法未来と現在が両方とも用いられるが、文法書や教材ではその説明が十分とは言えない。続いて、接続法未来が用いられる表現をもう少し具体的に挙げる。

- ① 接続詞 *se* に導入される条件の副詞節表現
- ② 接続詞 *quando* で導入される時間の副詞節表現
- ③ 接続詞句 *depois que, assim que* などで導入される時間の副詞節表現
- ④ 程度・様態の表現
- ⑤ 関係詞節表現
- ⑥ 譲歩の定型表現

①と②ではそれぞれ *se* や *quando* で導入される副詞節表現の中で用いられる動詞は接続法未来に限られ、接続法現在は認められないとされる。

(7) Se a Maria estiver em casa, vamos visitá-la. (もし Maria が家にいたら、会いに行こう)

(8) Quando começar a trovoadá, desligo o computador. (雷が鳴り始めたら、PCの電源を消す)

(Mateus et al. 2003, 264-265)

一方で、③では接続法未来と接続法現在のいずれも許容されるが、どちらかという接続法未来が用いられることが多いとされる (Comrie & Holmback 1984, 218)。

(9) Depois que você chegar / chegue, eu vou sair. (あなたが着いた後に、私は外出する)

(ibid)

④についても接続法現在が用いられることもあるとされるが本稿では取り扱わない (cf. 富野 & 伊藤 2013)。⑤の関係詞表現では先行詞の形式によって接続法未来が用いられる場合と接続法現在が用いられる場合がある。これについては 2.1.2 で詳しく扱う。⑥は定形表現であるため、これも本稿では省略する。

本稿では接続法未来と接続法現在が混在する③の時間の副詞節表現と⑤の関係詞節表現についてコーパスを分析して検証する。次節では③と⑤について、Comrie & Holmback (1984) の仮説を中心にさらに詳しくまとめる。

2.1.1. 時間の副詞節表現

ポルトガル語の文法書や教材では、接続法未来の用法として接続詞 *quando* (when) によって導入される時間の副詞節表現が挙げられることが多い。一方でその他の時間副詞節表現では接続法未来と接続法現在の両方が用いられている例が示されることがあるが、形式の違いによってどのような差異が生じるのか、明確な説明がない (e.g. Mateus et al. 2003, Raposo et al. 2013)。Comrie & Holmback (1984) は、*depois que* (after)、*assim que* (as soon as)、*logo que* (as soon as) に続く表現では接続法未来と接続法現在の両方が用いられ(10)、*antes que* (before)、*até que* (until) に続く表現では接続法現在のみ用いられ、接続法未来は用いられないと説明する(11)(12)。

(10) Depois que José comer, a família vai sair. (José が食べ終わった後に、家族は外出する)

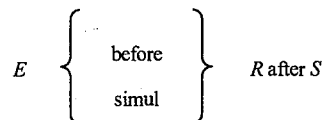
(11) José terá comido antes que a família saia. (家族が外出する前に José は食べ終わるだろう)

(12) Vamos ficar aqui até que chova. (雨が降るまでここにしましょう)

(Comrie & Holmback 1984, 228, 227, 231)

Comrie & Holmback や Fleischman (1982)、坂東(1994)によると、従属節内であらわされる事象 (*E*) が、発話時点 (*S*) 以降の内容であり、主節であらわされる参照事象 (*R*) と同時か、それ以前に起こる場合に、従属節内の参照時間事象に接続法未来が用いられるとされる(13)。

(13) Future subjunctive



(Comrie & Holmback 1984, 229)

これに基づいて考えると、(10)では(R)「家族が外出する」のが(E)「食べ終わる」よりも後であるため、接続法未来が許容される。一方、(11)では(R)「食べ終わる」のが(E)「家族が外出する」よりも前、(12)では(R)「ここに居続ける」のが(E)「雨が降る」よりも前であるため、接続法未来は用いられず、接続法現在が用いられる。

なお、Fleischman (1982, 137) は、接続法未来がラテン語の直説法未来完了と接続法完了が合流して形成されたことに触れたのちに(13)と同様の言及をしている。Fleischman は直接的な関係性について言及していないが、本稿筆者は接続法未来の起源に共通する「完了」の意味とその名残が、現代ポルトガル語の接続法表現に影響しているものと仮定する。

2.1.2. 関係詞節表現

関係詞節表現でも接続法現在が用いられる表現と接続法未来が用いられる表現があり、その違いを理論的に説明する文法書や教材がないため、両形式は混在して用いられるかのように見られかねない。これについても Comrie & Holmback (1984) は意味と共起の側面から違いを説明している。

(14) José quer casar com a mulher que tem muito dinheiro. (José は金持ちなあの女性と結婚したがっている)

(15) José quer casar com uma mulher que tem muito dinheiro.

(José は金持ちなとある女性と結婚したがっている)

(16) José quer casar com uma mulher que tenha muito dinheiro.

(José は金持ちな女性がいたら結婚したがっている)

(17) José quer casar com a mulher que tiver muito dinheiro.

(José は金持ちな女性なら誰でもいいので結婚したがっている)

(Comrie & Holmback 1984, 239)

関係詞節表現では形式的な定、不定に関わらず、先行詞が具体的に認識されている物や人物を指す場合 (*referential*) は直説法が用いられる(14)(15)。次に、先行詞が実際に存在する物や人物として想定されていない場合 (*non-referential*) は接続法現在が用いられる(16)。これに対し、接続法未来が用いられるのは、先行詞が定冠詞などを伴うが具体的な物や人物ではなく、特定集団の中における不特定な人物について言及する場合 (*generic*) となる(17)。なお、接続法現在を用いている(16)と接続法未来を用いている(17)の間に、時

間指示の面での差異はない (see also 彌永 2008)。

接続法未来が用いられる関係詞節表現は定冠詞を伴う先行詞の他に *aquele que* (those who)、*o que* (what)、*quem* (who, whoever) によって導入される表現が挙げられる。

(18) *Farei o que puder.* (出来る限りのことをします)

(19) *Quem chegar atrasado, fica lado de fora.* (遅れてくる人は外側に)

(Comrie & Holmback 1984, 250)

3. 研究設問

2.1 で見たように、Comrie & Holmback (1984) は、ポルトガル語の文法書や教材ではほとんど触れられる事がない、類似した表現で接続法未来と接続法現在が用いられる際の違いを時間指示以外の点から分析、説明している。ただし、同研究での仮説はすべてネイティブスピーカー (NS) の直観にのみ基づくものである。このようなアプローチでは、個人の社会言語的背景からの影響を受けやすく、作例も恣意的で代表性に欠けるものになりやすい (McEnergy, Xiao & Tono 2006, 6)。また、*depois que* の表現などの時間の副詞節表現の説明については「接続法未来が用いられる傾向がある」(Comrie & Holmback 1984, 218) としている曖昧な点も残る。

そこで本研究では Comrie & Holmback (1984) で扱われている時間の副詞節表現と関係詞節表現での接続法未来と接続法現在の使用の実態を、実際の NS の言語使用データ (コーパス) に基づいて検証していく。

4. 方法論

4.1. コーパス

本研究で分析する言語データには、ポルトガルの *Linguateca*³⁾ が構築した新聞コーパスの *Cetempúblico*⁴⁾ と *Cetenfolha*⁵⁾ の *Sketch Engine*⁶⁾ 版を用いる。*Cetempúblico* はポルトガルの全国紙 *Público* の 1991 年から 1998 年までの記事をコーパス化したもので、*Linguateca* のオリジナル版は約 1 億 8000 万語からなる。*Cetenfolha* はブラジルの地方紙 *Folha de São Paulo* の 1994 年の記事をコーパス化したもので、オリジナル版は約 2400 万語からなる。本研究で用いるのはこれらのうち、英国のコーパス分析ウェブサイト、*Sketch Engine* がライセンス公開している合計約 5600 万語 (両コーパスの内訳不明) のコーパスを用いる。

4.2. データ分析

コーパスは *Sketch Engine* の機能を用いて検索される。時間の副詞節表現は先行研究より接続法未来が期待される *depois que*、*logo que*、*assim que*、接続法現在が期待される *antes que*、*até que* の表現より、各副詞句から 5 語目までに共起する品詞タグを検索していく (20)。

(20) depois que o o o o o...

検索箇所

関係詞表現では接続法未来が期待される[定冠詞つき名詞] *que*、*aquele que*、*o que*、*quem*、接続法現在が期待される[不定冠詞つき名詞] *que*、*algum* [名詞] *que* (some [名詞] *who*) の各表現より、時間表現と同じく各関係代名詞から5語目までに共起する品詞タグを検索していく(21)。

(21) um xxx que o o o o o...

検索箇所

5. 結果

分析の結果は表1の通りである。

表1 各表現での接続法未来と接続法現在の使用の内訳


表現	表現の 産出数	接続法現在	接続法未来	カイ二乗値	p 値	期待される 形式	有意に多い 形式
<i>depois que</i>	1728	20	96	203.95	0.00	接続法未来	接続法未来
<i>logo que</i>	989	<u>232</u>	52	6.36	0.01	接続法未来	接続法現在
<i>assim que</i>	2436	99	336	633.31	0.00	接続法未来	接続法未来
<i>antes que</i>	806	224	0	73.25	0.00	接続法現在	接続法現在
<i>até que</i>	3455	1053	8	332.15	0.00	接続法現在	接続法現在
定冠詞先行詞	78865	2138	1974	1186.54	0.00	接続法未来	接続法未来
<i>aquele que</i>	5614	152	194	177.42	0.00	接続法未来	接続法未来
<i>o que</i>	87828	1642	1879	1539.49	0.00	接続法未来	接続法未来
<i>quem</i>	14658	888	2168	3494.96	0.00	接続法未来	接続法未来
不定冠詞先行詞	48180	2703	136	623.29	0.00	接続法現在	接続法現在
<i>algum que</i>	2233	207	14	39.98	0.00	接続法現在	接続法現在
コーパス全体	56768822	169901	56508				

時間の副詞節表現、関係詞表現とも、概ね先行研究の仮説どおりで、接続法未来が期待される表現では接続法未来が多く、接続法現在が期待される表現では接続法現在が多く用いられている。また、カイ二乗検定⁷⁾を用いて各表現での両形式の産出の差異の有意性を調べたところ、やはり概ね期待される動詞形式が有意に多く用いられていることがわかった。ただし、*logo que*のみ接続法未来ではなく接続法現在が有意に多く用いられることがわかり、Comrie & Holmback (1984) などの仮説とは異なる結果となった。

また、時間副詞節表現、関係詞表現ともに、接続法未来が期待される各表現では、カイ二乗検定による

有意差こそ認められるが、ある程度の接続法現在の使用も見られる。特に関係詞表現では絶対的な使用数では拮抗しており、接続法現在のほうが多い表現も見られる。一方で、接続法現在が期待される表現では接続法未来はほとんど見られない。この点も、先行研究の(13)の仮説を支持するものとなった。

なお、基準となる時間副詞節句や関係代名詞と接続法形式との間に他の接続詞などに導入される別の接続法表現が挿入され、集計結果に影響していることも考えられるが、コンコーダンスライン (KWIC) を目視したところ、実際にはこのような事例はほとんど見られなかった(図 2)。

Word sketch	
Thesaurus	
Sketch diff	
Corpus info	
My jobs	
User guide 	
Save	
Make subcorpus	
View options	
KWIC	
Sentence	
Sort	
Left	
Right	
Node	
References	
Shuffle	
Sample	
Filter	
Overlaps	
Frequency	
Node tags	

a proposta já seguiu para o ministério e logo que *haja* uma resposta . Luis Soares contactará foi adjudicada a 6 de Agosto e avançará logo que o processo administrativo *esteja* concluído começará no próximo dia 12 de Setembro , logo que os técnicos *reparem* uma válvula defeituosa Hendaye , preparando-se para atacar o atum logo que os cardumes *entrem* no golfo da Biscaia respectivas conferências das partes que reunirão logo que as convenções *sejam* ratificadas pelos primeiros pagamento da sua dívida à banca , para que logo que esta fase *termine* cumprir o pagamento dos apalavrado um contrato para mais quatro anos . Logo que ele *venha* da Bulgária , esse acordo será obriga os bancos centrais a comprar ou vender logo que uma divisa se *aproxime* do seu valor mínimo para ninguém . " Esta posição será alterada logo que *sejam* imputadas responsabilidades pela polícia opte abertamente pela repressão logo que *tenha* passado o actual período de festividades seguir de avião para a Bósnia e Croácia , logo que possível . Espera-se que *seja* na próxima pobres andam a ganhar demais , e curam-se logo que eles *passem* a ganhar menos . Se JCE medir momento , ainda ando muito ocupado , mas logo que a ocasião se *proporcione* quero ajudar os férias de Verão . Caso contrário , começam logo que o projecto *esteja* concluído . < / p > < p > Abertos Oliveira , no sentido de suspender a ordem logo que o relatório dos bombeiros *dê* entrada nos as funções de Comissário Internacional , logo que *deixe* de exercer as funções de treinador uma semana . O autarca está convencido que logo que este assunto *fique* resolvido é possível preventiva , todos os bens de um suspeito logo que *haja* indícios de se tratar de um traficante outras empresas , como a Teixeira Duarte . Logo que a empresa se *comprometa* a respeitar a lei enfrentar sérias dificuldades de sobrevivência logo que *cessem* os apoios da CE e do Estado português

図 2 Sketch Engine の KWIC コンコーダンスの例 (logo que 表現)

6. 考察

接続法未来が期待される表現で接続法現在も多く用いられ、反対に接続法現在が見込まれる表現では接続法未来がほとんど用いられない点については、接続法現在の表現のほうが表現と動詞形式の親和性が強く、接続法未来の表現では親和性が弱いものと考えられる。

時間の副詞節表現を、(13)を考慮しながら再考すると、接続法現在の表現は接続法が用いられる事象時点 (E) が参照時点 (R) を挟んでより後に、接続法未来の表現では E は R よりもより発話時点 (S) に近くなる。

(22) 接続法未来の表現: $S \rightarrow E \rightarrow R$

(23) 接続法現在の表現: $S \rightarrow R \rightarrow E$

接続法未来の起源からの「完了」の名残を考慮すると、(22)で E に「完了」形 (接続法未来) と非「完了」形 (接続法現在) の両方が許容され、(23)で E に「完了」形 (接続法未来) が用いられないのは、2.1.1 で述

べた通りアスペクトの面から自然なものと考えられる。

さらに、モダリティの観点から、*remoteness*⁸⁾(cf. Palmer 2001, 219; see also Lyons 1977, 818) の考え方を援用して考察すると、*R* を境界として接続法未来の表現の *E* は時間の観点からも現実性の観点からもより発話時の状況に近く(22)、接続法現在の表現の *E* はより遠くなる(23)。この点でも、接続法現在表現での動詞形式との親和性の強さと、接続法未来表現での親和性の弱さ、すなわち接続法未来と接続法現在が混在することに関係しているものとする。

また、関係詞節表現でも *remoteness* の考え方を援用する。関係詞節の表現でも接続法未来を用いる場合、先行詞は一定の集合内における不特定の対象物であり、形式的にも先行詞には定冠詞や指示詞など定の形が用いられる。一方で、接続法現在を用いる表現では、先行詞は現実世界では想定されないものであり、形式的にも先行詞には不定冠詞や不定形容詞などが用いられる。ここでも、一定の集合内外を境界とした発話時の状況からの現実性の遠さが接続法現在表現での動詞形式との親和性の強さと、接続法未来表現での混交状態に関係していると考察する。

なお、時間の副詞節表現で接続法未来の使用が見込まれる表現のうち、*logo que* 表現のみ接続法現在が有意に多く用いられていたことについては推測ではあるが、先行研究を考慮すると、同表現が接続法未来を許容する表現から接続法現在との親和性が強い表現へと移行した可能性が高いと考えられる。ただし、これには通時的な言語分析による検証を行う必要がある。

7. まとめ

本稿では文法書や教材で解説が不十分な接続法未来と接続法現在の用いられ方の違いについて、理論的に説明している Comrie & Holmback (1984) を中心に仮説をまとめ、さらに実際の言語データを用いてこれを検証した。

まず、先行研究をまとめると、接続法未来は「接続法現在に対応する未来時制」及び「未来を表現するための動詞形式」ではない。接続法未来は一部の非過去指示表現で用いられる形式であり、接続法現在とは時間指示では対立せず、使用表現が異なるものである。ただし *depuis que*、*logo que*、*assim que* など、副詞節内での参照時内容が主節の内容よりも「前」になる一部の時間副詞節表現では接続法現在と選択的となる。また、関係詞節表現では文脈と先行詞の語彙や冠詞によって接続法未来と接続法現在は使い分けられる。

ただし、先行研究が根拠とする NS の直観は実際の言語使用とは異なっている可能性があるため (McEnergy et al. 2006, 6)、本稿ではコーパス分析を行った。この結果、接続法未来が多く用いられると考えられる *logo que* の表現では、実際には接続法現在が多く用いられていることが明らかになった。また、接続法未来が用いられる各表現では接続法現在も多く用いられ、特に関係詞表現では絶対数では接続法現在の使用が多く用いられる表現も見られた。一方で、接続法現在が用いられる表現では接続法未来はほとんど

用いられることはなく、先行研究を支持する結果となった。

8. 今後の課題・展望

結びにかえて、本稿では対象としなかった2点を今後の課題として挙げる。

まず、本稿では接続法未来の通時的な考察を行っていない。しかし、本稿で対象とした各表現がどのような変遷をへて接続法未来、接続法現在のそれぞれが用いられるに至ったかをデータに基づいて検証することは、接続法未来研究にとって重要である。ポルトガル語の通時コーパスは信頼性の面で有用なデータが乏しい状況であるとされるが、今後の関心の対象である。

また、本稿では他のロマンス諸語への配慮が乏しい。接続法未来が存在しないフランス語やイタリア語など、また、定形表現を除いて接続法未来が用いられなくなってしまったスペイン語やガリシア語では、本稿で扱った各表現はどのような動詞形式との共起の傾向を見せるのかを分析することで、ポルトガル語の接続法研究に還元できる有益な情報が得られる可能性もある。

最後に、本研究の展望として、コーパスやそれを用いた研究の成果が積極的に文法書や教材に反映されていくことが望まれる。本稿での先行研究との相違に見られるように、NSの直観は必ずしも正確に言語の実情をとらえられているわけではなく、またNS同士で意見が割れることもある。そのため、英語学では1990年代初頭よりコーパスの情報を教材に取り入れる動きが見られている (cf. Hunston & Francis 2000)。2016年現在、ポルトガル語のコーパスは大規模なものが多数揃っており、ポルトガル語においてもNSの直観に加えてこれらのコーパスを活用して、直観のみに頼らない、より客観的で信頼性、現実性の高い教材の開発が一般的になることに期待している。

9. 註

- 1) 本稿は日本ロマンス語学会第54回大会における口頭発表の内容を元に、発表後の質疑応答などを受け加筆、修正したものである。ご意見やご助言をいただいた各言語の先生方に多大なる感謝を申し上げます。なお、本稿の内容の責任はすべて筆者によるものである。
- 2) 寺崎 (1998, 210) はスペイン語の接続法未来を「接続法現在-re形とでも呼ぶべき」と提案しており、本稿筆者もこれを支持しているが、呼称などの議論は本稿では行わない。
- 3) www.linguateca.pt/
- 4) www.linguateca.pt/CETEMPublico/
- 5) www.linguateca.pt/CETENFolha/
- 6) the.sketchengine.co.uk
- 7) カイ二乗分析には早狩進氏が開発した Excel マクロファイル、Seagull-Stat の有償版を利用した。
www7b.biglobe.ne.jp/~hayakari/

- 8) 一般的には非過去反実仮想表現や丁寧の表現での過去形式 (接続法や条件法などを含む) を考察する際に用いられる術語である。

10. 参考文献

- Comrie, B. & Holmback, H. (1984). The Future Subjunctive in Portuguese: A Problem in Semantic Theory. In *Lingua*, 63. 213-253.
- Cunha, C. & Cintra, L. F. L. (2007). *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Rio de Janeiro: Lexikon.
- Fleischman, S. (1982). *Future in Thoughts and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hunston, S. & Francis, G. (2000). *Pattern Grammar—a Corpus-driven Approach to the Lexical Grammar of English*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Lyons, J. (1977). *Semantics 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mateus, M. H. M.; Brito, A. M.; Duarte, I.; & Faria, I. H. (eds). (2003). *Gramática da Língua Portuguesa*. Lisboa: Caminho.
- McEnery, T.; Xiao, R.; & Tono, Y. (2006). *Corpus-Based Language Studies*. Oxford: Routledge.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and Modality, second edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Raposo, E. B. P.; Bacelar do Nascimento, M. F.; Mota, M. A. C.; Segura, L.; & Mendes, A. (eds). (2013). *Gramática do Português*. Lisboa: Fundação Calouste Gulbenkian.
- 彌永史郎 (2008). 「ポルトガル語接続法の時称」. 『京都外国語大学研究論叢』, LXXI, 167-180.
- 寺崎英樹 (1998). 『スペイン語文法の構造』. 大学書林.
- 富野幹雄 & 伊藤秋仁 (2013). 『総合ブラジルポルトガル語文法』. 朝日出版社.
- 坂東照啓 (1994). 「ポルトガル語の接続法未来に関する基礎的研究」. 『ロマンス語研究』, 26, 149-160.